

インド社会学における貧困問題の研究動向

— 開発政策・言説・実践とのかかわりから —

佐藤 裕

都留文科大学文学部

アブストラクト：本稿の目的は、インド社会学の草創期である1950年代からこんにちにおいて、開発／発展にかかわる社会学研究が貧困というテーマにどう関わったのかを整理することである。ここでの焦点は開発の政策や言説、実践が変化するなかで、社会学がどのような領域で実証研究の成果を収めたのかである。分析に際し、本稿では次の時代区分を設ける。第1期は1950-60年代で、ネルー政権下で社会的公正と貧困削減の理念のもとでトップダウン型の開発計画が進む一方で、カーストと階級の階梯から農村の社会構造が分析された時期である。第2期は1970-80年代で、近代化政策の諸矛盾に抗う社会運動が貧困、とくに女性や環境といった文脈で生起し、社会学でも代替型開発／発展の議論が生まれた時期である。第3期は1990年代以降で、経済自由化や都市化と並び、宗教ナショナリズムの台頭を受けて貧困や剥奪が社会学研究の中核の1つをなした時期でもある。とくにインド社会学がさまざまな時間軸・空間軸で生起する貧困問題の研究を通して、国際開発論にも寄与しうる研究を生みだしていったとするのが本稿のおもな知見である。

Changing Discourses on Development and the Poverty Question in Indian Sociology

Yutaka SATO

Faculty of Literature, Tsuru University

Abstract: This paper explores the trends in debates on poverty in the context of development since the inception of Indian sociology in the 1950s up to the present. Particular attention is paid to the achievements of empirical studies that Indian sociology has made in the context of development policies, discourses and action. The paper traces their evolution in three distinct but overlapping phases: the era of Nehruvian socialism in the 1950s-60s, the era of grassroots voluntary action in the 1970s-80s, and the post-liberalisation era since the 1990s. The first era, during which the ideal of social justice and poverty alleviation took shape, was marked by debates on the caste and class hierarchy characteristic of a predominantly agrarian society. The second era gave rise to grassroots movements that asserted issues, inter alia, gender equality and ecology, which turned sociological attention to alternative development. The third era brought sociological debates on poverty and deprivation to centre stage in the wake of market liberalisation, urbanisation and religious nationalism. The paper concludes by suggesting that Indian sociology richly informs development studies on the poverty question that has been raised in different contexts across time and space.

1 はじめに

本稿の目的は、インド社会学が開発計画や社会発展とのからみで貧困問題をどのような視角から分析してきたのかを時代診断的に検討することである。筆者は以前、インドの社会学の研究動向をふまえて、開発／発展の社会学に関する諸議論の変遷をマクロな社会変動論の視点から検討し、階層間格差、労働問題、社会運動やジェンダー不平等などのテーマに即して幅広く紹介した（佐藤 2019）。本稿ではとくに農村／都市問題を中心にした〈開発／発展と貧困〉の実証研究の成果に的を絞り、インド社会学が国内の「上からの」「下からの」開発の動向にどう軌を一にしながら展開していったのかを整理しながら、上記の課題に応えようとするものである。

インド社会学においては貧困、より広範には不平等は、旧不可触民であるハリジャン＝ダリト（*Dalits*）⁽¹⁾やトライブといった被差別集団の解放をめぐる諸問題として研究がなされ、その蓄積は膨大である⁽²⁾。その一方で、国際社会学会（ISA）の元会長のタライラット・オーメンは「貧困問題は経済学的、せいぜい政治学的（貧困層には声がないという意味で）な課題で、社会学的課題になることはほとんどない。したがって、インドの社会学者たちは貧困研究にほとんど関心を払ってこなかった」（Oommen 2007: 35, 括弧内原文訳）と批判するように、「貧困」そのものに切り込んだ理論・実証研究は少ない（Kaur 2003）。むしろ、カーストやトライブ、家族・親族組織の枠組みで再生産される資源・機会配分の不平等を主としながら貧困を付随的に論じてきたとみてよい（Béteille 2005）。貧困を開発社会学⁽³⁾の中心に据えたラヴィンダール・コールは、インド社会学が土地制度をとりまく権力構造・搾取・不平等を軸に農村の社会構造を分析することで、貧困の原因と影響を暗に示してきたものの（Béteille 2005）、「貧困が何であるかという問題と貧困の概念化をあつかってこなかった」（Kaur 2003: 140）と反省をうながす。

貧困削減は開発と同義のようでもあり、ある一部しか重ならない。たとえば、開発社会学を「社会文化的な状況と開発の諸過程との接点」（Singh 2010: 3）と定義したシェオバハール・スィンは、教科書として書かれた同書でもインドでの開発社会学の動向を整理した論考（Singh 2014）でも経済発展の社会文化的諸側面に議論を傾注させた。一方で、コールは貧困を生きる当事者にとって経済発展や開発という行為がもたらす意味を開発社会学の分析対象として提唱した（Kaur 2003）。たとえば「貧しい人」

(1) 政府が教育、就職、政治の領域で優遇策をとるために定めた指定カースト（Scheduled Castes）に分類されるダリトは、差別からの解放を訴える当事者たちが自らを呼称した名称である。

(2) 貧困削減と連動するカースト差別の撲滅は、国民統合の理念でもある社会的公正の根幹をなし、①1960年代なかばに揺らぐ国家主導型の開発政策においても、②1960年代末に展開し、1970年代に広がりを見せた開発のグラスルーツからの再定義においても、③1991年以降の経済自由化を受けたグローバル化と階層構造の変容、分配と社会的承認の不平等においても一貫していた。

(3) 筆者の知るかぎり、インド社会学ではコール（Kaur 2003）のみが“development sociology”を論文の題目に含めているが、本文中では一貫して“sociology of development”と表記されている。

を意味する“bechara garib”について、*Oxford Hindi-English Dictionary*ではbecharaは「無力な (helpless)」や「哀れな (wrecked)」を、garibは「貧困 (poor)」をそれぞれ意味するが、彼女によると前者は村の男性未婚者は「感情的に」貧しく、家族労働力を常時確保できないため、病気や不慮の事故の際に貧困に陥るという理解がある (*ibid.*: 153)。家族をはじめとした社会制度と不可分の意味構成である。

コールはこうした課題に定性的かつ実証的に応えるのが社会学の役割であるとする。測定可能な貧困の概念化を試みる経済学に対して、社会学と社会人類学は貧困層の内的多様性を記述するあまり、政府による貧困対策に適切な提言ができないという自己認識から脱する必要があるからだ。この領域での可能性を切り拓いたのが、ビスワジット・ゴーシュ編『開発を問いただす——今日のインドにおける開発／発展の言説』(Ghosh ed. 2012)である。ゴーシュは序章で開発言説と実践が「誰のための」、「誰による」、「誰の犠牲による」過程なのかを問うたうえで、どの主体が開発をめぐる権力関係を構築し、語るのかを分析することの重要性を訴えた (Ghosh 2012a: 1-2)。さらに彼は、諸個人の不自由を構成する貧困と専制、貧弱な経済的機会や組織的な社会的剥奪などを除去する包摂的な発展が必要であり、かつ専門家の統制なしの「自身の開発 (self-development)」がインドの文脈に適合的であるとした (Ghosh 2012b: 45)。

開発による犠牲と基本的ニーズ・社会的尊厳の欠如を規定する貧困は、特定の時空間で再編成される (Kaur 2003: 154)。つまり農村と都市、そして両者が交差するところに貧困と開発／発展の関連性が投影されるわけで、そこに国家政策や資本主義の諸矛盾が媒介する。インドは1947年の独立以降、民主主義と多元主義の模索にあたり社会的公正 (social justice) という理念を掲げたが (Oommen 2007; Panini 2014)、貧困削減は最重要課題であった。そして、これらの課題の変遷は、インドの社会運動やNGOを貧困とのかかわりで論じた社会学者ラカ・レイとメアリー・カツツェンステインによる時期区分——トップダウン型社会民主主義 (1947-64年)、運動の「脱制度化」(1967-88年)、市場経済と宗教ナショナリズム (1989年以降)——に対応する (Ray and Katzenstein 2005)。本稿でもこの時代区分にしたがって、インド社会学で独自に展開した貧困と開発／発展の諸議論を整理する。なお、断りのないかぎり、本稿で言及する研究はすべてインド人社会学者によるものである。

2 「貧困」研究とインド開発社会学の時期区分

(1) インド社会学会における動向

本節ではまず、インド社会学における〈開発／発展と貧困〉にかかわる研究の動向を整理したい。表1はインド社会学会の各年次大会 (All India Sociological Conference) で組まれたシンポジウムのテーマである。1960年代までは国民統合や近代化と伝統などが主要テーマであった。初代首相のジャワハールラール・ネルーのもとで進められた5か年計画とトップダウン型社会民主主義に対応するテーマでもある。その後、1960年代なかばには緑の革命による地域間格差、北インド諸州における食糧不足など開発の歪みが顕在化し、その一方で1968年以降、女性やトライブ、土地なし農民などをアク

ターとし、文化的差別やジェンダー、環境問題に抗う「新しい」社会運動が展開した。フォーマル・セクターの労働運動といった制度的政治の「枠外」で民衆が社会的公正を「下から」主張した1970年代には、開発社会学をはじめ農業構造やカースト秩序やトライブ社会の変容、ジェンダーなどがテーマ群を構成したことがわかる。

この傾向は1980年代にも続き、とくに社会的行為者としての女性やエスニック集団などがテーマ群を構成するようになった。経済自由化に踏み切った1990年代には、1984年のボーパール化学工場事故を含む環境問題や、文化とナショナル・アイデンティティの変容など、反省的近代に結びつくテーマ群が目立つ。

表1 インド社会学会年次大会におけるシンポジウムのテーマ

開催回・年	開催地・校	大会シンポジウムのテーマ
1. 1955	デヘラードゥーン	社会変動
2. 1957	バトナー	(記録なし)
3. 1958	カルカッタ	(記録なし)
4. 1959	ラクナウ	心理学, 社会階層
5. 1960	アーグラ	(記録なし)
6. 1961	サガール	(記録なし)
7. 1967	ボンベイ, タータ社会科学研究所	民主主義政策の社会学的前提/教育と社会変動/産業化の社会的帰結
8. 1968	アーグラ大学	宗教と近代化/政治社会学/階層構造の変容とパターン
9. 1969	インド工科大学デリー校人文・社会科学部	インドの思想・実践におけるガンディーの貢献/科学・技術・社会/宗教社会学/親族の社会学/教育と社会/現地語での社会学教育
10. 1970	オスマニア大学	国民統合の社会学/社会主義革命/社会組織の社会学
11. 1972	グジャラート大学	社会人口学/開発社会学/カーストの変容とパターン/アーバニズムと都市化
12. 1974	バナラス・ヒンドゥー大学	コンフリクトの社会学/開発社会学/法社会学
13. 1976	バンジャープ大学	観察・分析・介入者としての社会学者/社会運動の社会学/小農と労働者の社会学/社会学教育・研究の転換に向けて
14. 1978	ジャバルプル大学	インドにおける教育政策/トライブ社会の変容/変化する女性の地位
15. 1980	メーラト大学	社会階層・家族・社会変動
16. 1982	アンナマライ大学	カースト・階級・ジェンダー
17. 1984	南グジャラート大学	変化に向けた社会的行為/エスニシティとエスニック過程
18. 1987	ノースイースタン・ヒル大学	社会学と社会変革
19. 1989	ハリヤーナー農業大学	農村開発
20. 1993	マンガロール, 聖アロイオス大学	アイデンティティ・公正・社会変革
21. 1994	ジャワハールラ・ネルー大学	社会変動の文化的側面
22. 1995	バルカトゥラー大学	変動の諸課題とインド社会学——ボーパール事故の回顧とこれから
23. 1996	シヴァージー大学	エコロジー・社会・文化

開催回・年	開催地・校	大会シンポジウムのテーマ
24. 1997	オスマニア大学	インド独立50年と今後
25. 1998	アリーガル・ムスリム大学	南アジアにおける国民と国籍、ナショナル・アイデンティティ
26. 2000	ケーララ大学	インドの市民社会
27. 2001	グル・ナーナク・デーヴ大学	インドにおける社会学の半世紀（1951-2001年）—— 諸課題への応答と期待
28. 2002	インド工科大学カンブール校	グローバル化とインド社会
29. 2003	マハラーナ・プラターブ農業技術大学	社会政策・ガバナンス・動員
30. 2004	ディーン・ダヤール・ゴラクプル大学	社会科学をめぐる国家政策
31. 2005	ジャンム大学	社会学教育・研究の再設計
32. 2006	マドラス大学	科学・技術・社会
33. 2007	カルナータク大学	国家・市民社会・社会的公正
34. 2008	ラージャスターン大学	若者・グローバル化・社会変容
35. 2009	カシミール大学	アイデンティティ・開発・国家建設
36. 2010	ラヴェンシヨウ大学	開発・政治形態・社会的緊張
37. 2011	ジャワハールラ・ネルー大学	インドにおける社会学と社会変容の危機
38. 2012	モハラール・スカディア大学	現代インド社会—— 諸課題への応答
39. 2013	カルナータカ州立放送大学	不平等・社会的公正・エンパワーメント
40. 2014	マハートマ・ガンディー・カシー・ヴィ ディヤピス	開発・多様性・民主主義
41. 2015	カリンガ産業技術大学社会科学研究所	開発、周縁化と民衆運動
42. 2016	テズプール大学	インドにおける社会学的伝統の再考
43. 2017	ラクナウ大学	新自由主義・消費・文化
44. 2018	聖フィロメナ・コレッジ	インドにおける社会学的ディスコースの再構築—— 周縁層の視点から
45. 2019	ケーララ大学	環境・文化・開発—— ディスコースと交差性
46. 2021	ムンバイ大学	憲法・シティズンシップ・マイノリティ—— インド共和国の70年を位置づける
47. 2022	メーガーラヤ科学技術大学	インドにおける社会学百年の軌跡—— 将来につなぐ再訪

出典：Indian Sociological Society (2020) “Chronology of All India Sociological Conferences (AISCs),” (Retrieved 9 July 2022, http://www.insoo.org/images/Websitematterof_ChronologyofAISCs_till2019_converted.pdf) ならびに同学会からのメール案内を筆者訳出のうえ作成。

インド社会学会では、とくに2009年度の大会以降は開発／発展をテーマにしたシンポジウムが相次いで開催された。この流れに呼応するように、インド社会学会の機関誌である *Sociological Bulletin* でも、ジェンダーと世帯内意思決定 (Ray 2008)、都市や農村、社会運動といった領域で「貧困」をあつかった論文が増加傾向にあった (表2)⁽⁴⁾。これは、2005年から2013年にかけて国民会議派政権 (当

(4) *Sociological Bulletin* の刊行を2017年から引き継いだ大手出版社の Sage Publications でのキーワード検索による。インド社会学会の生涯会員である筆者は、同誌の論文すべてにアクセス可能である。

表2 *Sociological Bulletin* 掲載論文における「貧困」キーワードのヒット件数

	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	2020年代	計
一般理論・知識	2	1	5	4	1	3	8	1	25
計画・開発	2	2	2	1	2	6	3	2	20
政治		1	3	1	1	5	3	5	19
性・ジェンダー				1	2	6	13	6	28
家族・親族	3	1				1	2		7
都市	1	1	1	1	2	1	7	1	15
研究動向			3	5	1	1	4	2	16
経営・産業・労働		1	1	1	1	3	1		8
農山漁村・土地制度	1	3	6	5	1	3	3	1	23
教育	1		1	2	3		4	1	12
階層・階級・社会移動			2	2	2		1		7
カースト		1	1						2
宗教		1				1			2
ディアスポラ						1	1		2
社会運動			1		3	6	7	3	20
社会人類学		1					3	1	5
近代化・社会変動	1	2	1	1	4	2			11
ダリト ^{注)}	1		1	1	2	1	3	1	10
トライブ		2			1	1	1		5
民族・エスニシティ				1	1	1	2		5
保健・医療						2	1		3
逸脱・社会病理	2					1			3
国内移民・移動	1			2			1	1	5
科学・技術	1		1		2	1			5
調査法							1		1
環境					1	1	2	2	6
文化・メディア								1	1
職業				1	1				2
社会集団・組織論	1		1						2
人口				1					1
子ども・若者				2			2		4
経済		1			1			1	3
その他		1	1		1	5	2	1	11
計	17	19	31	32	33	52	75	30	289

出所： *Sociological Bulletin*, Vol. 1(1), 1952からVol. 71(3), 2022までの各号より筆者作成。

注：日本社会学会の「専攻分野」一覧を参考に本表を整理したが、インド社会学会の特徴や動向をふまえて分類したため、本表の専攻分野名は日本社会学会のそれと一致しないものもある。

時)が「スラムなきインド」のスローガンを掲げてインフラ建設と都市空間の近代化が進められたジャワハールラール・ネルー国立都市開発計画 (Jawaharlal Nehru National Urban Renewal Mission, 以下JNNURM) や、農村の失業者にたいして年間100日の雇用を約束したマハートマ・ガーンディー全国農村雇用保障計画 (Mahatma Gandhi National Rural Employment Guarantee Act, 以下MGNREGA) とも関係している。

アーナンド・クマールは後者について、何百万もの土地なし農民たちへの経済的成員資格の付与であり、経済自由化の過程で国家が社会保障から撤退するなかでメディアや労働組合、NGOや研究者たちが大都市中心の投資と農村の経済的排除の問題を指摘した成果だと評価する (Kumar 2011: 213-14)。5か年計画を基軸に貧困の撲滅と社会的公正の達成を重化学工業やインフラ建設、米国からの援助を受けたコミュニティ開発で進めようとしたネルーと、インド社会と民主主義の基礎単位を村落共同体に求めたガーンディーがそれぞれの計画の名称に含まれている点や、今世紀に入ってから国家建設時の貧困問題が解消されていない政策的課題である点、これらが「開発」の文脈で社会学の学協会で議論される点に留意されたい。

(2) 社会学教育における開発／発展と貧困問題の位置づけ

インド社会学における開発／発展の位置づけは、政府機関である大学助成委員会 (University Grants Commission, 以下UGC) が2001年にまとめたモデル・カリキュラムにも明確に示されている⁽⁵⁾。表3はUGCが提示した大学院モデル科目のシラバスに、①近代化や開発／発展、差別や貧困という用語や、②開発／発展にかかわる参考文献の記載があるか、さらに③UGCが専門職・応用プログラムとして推奨できるとみなしているかをまとめたものである。同表からは「変動と開発の社会学」がすべてにあてはまる一方で、グローバル化やジェンダー、環境や科学技術、農村や都市、教育や保健、比較や政治にかかる社会学のモデル・シラバスが近代化や開発／発展を鍵概念の1つとするとともに、開発研究にかかわる文献を提示している点が興味深い。また、農村や都市、産業社会学等において貧困がテーマになる点も、これらが途上国開発の実証分析における社会学研究に対応しうることを示している。いいかえれば、拙稿 (佐藤 2019) で論じたようにインドで確立されている「開発社会学」以外の連字符社会学でも、開発／発展への視点や分析が重要視されているということである。

さらに、経済自由化から10年経った2001年にすでに「グローバリゼーションと社会」や「ソー

(5) 座長はD. Sundaram (マドラス大学, 政治社会学), 秘書はK.P. Singh (UGC, 図書館情報学), 委員はUttam Bhoite (パーラッティー・ヴィディヤピート, 社会運動論), Karuna Chanana (ジャワハールラール・ネルー大学, 教育社会学), N. Jayaram (ゴア大学, ディアスポラ研究), Aneta A. Minocha (デリー大学, 医療社会学), A.R. Momin (ムンバイ大学, 社会人類学), S.L. Sharma (バンジャール大学, 開発社会学), R. Venkataratnam (マドゥライ・カムラージ大学, 医療社会学) である (University Grants Commission 2001: 1)。

表3 大学助成委員会による社会学系大学院のモデル・カリキュラム案

科目コード・名称	授業概要での記載		開発研究の参考文献		専門職・応用プログラムへの推奨
	近代化、 開発／発展	貧困・差別	インドの 出版社	英・米の 出版社	
C01 古典社会の伝統					
C02 社会学の理論的視角					
C03 社会調査法					
C04 インド社会学の視角	○				○
C05 変動と開発の社会学	○	○	○	○	○
C06 比較社会学	○			○	
E02 ジェンダーと社会	○		○	○	
E03 環境と社会	○		○	○	○
E04 エスニシティ・多元主義・国家					
E05 大衆文化とマスコミの社会学					
E06 グローバリゼーションと社会	○		○	○	
E07 南アジアの社会学	○		○		
E08 科学・技術・社会	○		○	○	○
E09 情報社会の社会学					
E10 インドの農村社会	○	○	○		○
E11 インドの都市社会	○	○	○		○
E12 ソーシャル・マーケティング	○			○	
E13 インドのディアスポラ研究					
E14 宗教社会学					
E15 教育と社会	○		○	○	○
E16 保健社会学	○		○		○
E17 老年社会学		○	○	○	
E18 インドの産業と社会		○	○		○
E19 犯罪学					
E20 親族・結婚・家族の社会学					
E21 インドの社会運動	○		○		
E22 政治社会学	○				
E23 周縁コミュニティの社会学	○	○	○		
N/A 法社会学					○
N/A 水・資源管理の社会学					○

出所：University Grants Commission (2001) より筆者作成。

注：「専門・応用教育への推奨」があるものの、大学院モデル・カリキュラム案には含まれなかった2科目（最下段2科目）を追加した。

シャル・マーケティング」⁽⁶⁾とならび「周縁コミュニティの社会学」や「水・資源管理の社会学」も科目案として提示されている点が興味深い。都市部を中心とした資本蓄積、サービス経済や中産階級の台頭とともに、グローバル化の諸矛盾が階級と貧困をはじめ、カーストやエスニックな差別、環境問題、宗教間対立とのかかわりでテーマ化されていると推測できる。

貧困削減をはじめとした開発の言説と実践は、開発計画や社会発展、それに対応した高等教育や研究を通じた知識の生産と関連する。この点をふまえ、次項からは前述の時期区分、つまり①トップダウン型社会民主主義、②社会運動の「脱制度化」、③市場経済との対応関係を軸に主要な先行研究の成果を示す。

3 トップダウン型の開発による分配と公正

(1) 国家建設と開発援助の役割

独立後インドにおける発展の初期条件は、米国の歴史社会学者、バリントン・ムーア（1966=2019）が指摘するように、地主による土地の専有が著しく、産業が育成されない、非識字者が多数を占める農村社会であった⁽⁷⁾。旧宗主国から議会制民主主義が移植されたインドにあって、離陸の段階にもなかった資本主義的近代化は、貧困のマクロ社会学的考察の関心でありつづけた。スウェーデンの経済学者・社会学者グナー・ミュルダールは、インドを軟性国家と称した。民主的計画化のもとで決定された政策が、仮に立法化されたとしても執行されることがあまりなく、政府当局が政策を策定する場合でさえ、国民に義務を課すことを嫌うという「社会的規律」化の欠如に特徴づけられる国家のことである（Myrdal 1968=1974: 51）。

インドにおける社会開発は、1952年に初代首相であるジャワハールラール・ネルーのもとで施行されたコミュニティ開発プログラム（Community Development Programme）に端を発する。同プログラムはマハートマ・ガンディーがインドの独立運動のなかで構想した農村開発と雇用促進に根ざすものである。ネルーや地域計画家たちが模索したのは、インド農業の集成的変革を地域社会レベルで促進・組織化・運営する「非公式リーダーシップ」の形成であった。とはいえ、スニル・バブによると、ネルーらの関心は農村開発を産業化政策の一環として進めることで、その手段は1960年代の緑の革命を通して食糧の増産と生産性の増大を図ることであった（Babu 2013）。

コミュニティ開発プログラムは米国の援助を、その影響に関する研究はフォード財団やロックフェラー財団の支援を受けながら展開した。その結果、米国で発達した計量的手法が農村研究に応用されたが、「インドの土壤に根ざしていない」といった批判を受けた。その批判の急先鋒はラクナウ大学文学部社会学科を拠点とした「ラクナウ学派」であり、その焦点は外発的な開発計画が自給自足的・

(6) 筆者が知るかぎり、この分野で社会学者たちを擁する大学院大学は、国立グジャラート大学社会科学部社会経営研究センター（Centre for Studies in Social Management, School of Social Sciences, Central University of Gujarat）のみである。

(7) 1961年のインドにおける農村人口比率は82.0%、識字率は24.0%であった。

自治的村に根ざすガンディー以降の価値構造をどう変化させたのかであった (Kaur 2003)。とくに貧困を植民地支配の残滓のみに求めるのではなく、開発／発展に適合的な社会制度の設計において、複雑でありながらも変容しつつあるインドの価値体系を調査するのが開発と計画の社会学がはたす役割だとされた (Saksena 1971: 2)。これを起点に、インドの農村社会学や開発社会学では、権力・富・威信をめぐる村落で生起するインフォーマルな政治と、それを支えるカーストや階級構造に関する研究が進められた (Babu 2013)。

(2) 開発イデオロギーの生成と開発理論の位置づけ

独立後から1960年代にかけてのインドの国家ビジョンは、国家の法(的)・行政(的)権力による経済社会発展により貧困が解消されることであった。

インドにおける開発主義国家 (the developmental state) は、当時人口の1割程度しか占めなかった都市において生まれた新しい専門職従事層、つまり中産階級が牽引した (Deshpande 2003: 144)。かれらが構成した開発主義レジームは、専門技術職が牽引する科学技術をめぐる社会過程である。国家はこうしたテクノクラートの助力のもとで、開発を必要とする国民の代わり／のために開発をもたらす役割を担った。政教分離主義の理念のもと、属性を問わず民主主義的政治過程により国民を動員し (*ibid.*: 144-45)、これまで手の届かなかった社会の各層まで「国家」を浸透させたのがネルー時代の功績である。

ここでの「動員」は、国際分業体制を背景に豊富な低賃金労働力を活用し、超国籍企業を誘致することで工業化を図った権威主義体制下でのそれとは異なる。とりわけ東・東南アジアでは、国家への忠誠と軍を規範にした規律を国民に求め、労働者の権利を抑圧しながら生産過程に国民を動員する一方で、地域社会や家族の福利は二義的なものとされた。民主主義体制下で展開したネルー政権時代の開発主義は、デヴ・パタックとアミヤ・ダスによると、「資本主義市場を軸とした開発の正当性と安定性を促進し、それに公衆の社会福祉が続く」(Pathak and Das 2019: 5) ことを意味し、経済主義と近代主義とが結合するイデオロギーでもあった。

興味深いことに、インドの社会学では近代化理論への応答は実証研究を通してさかんになされてきたものの、若干の例外を除き、従属理論および世界システム理論は紹介されてもインド社会の分析には昇華されてこなかった (Singh 2010; Kumar 2011)。たとえば、英国を拠点に国際開発研究に従事する社会学者ヴァンダナ・デサイは、ボンベイのスラム調査をもとに、ラテンアメリカのNGOが都市貧困層を動員して集合的消費手段への権利保証を要求してきた例に触れ、「研究者、とくに社会学者たちは〔住宅という〕概念を単なる物理的単位としてではなく、広範な社会経済的・政治的含意をもつ過程」(Desai 1995: 294) としてとらえることを提唱する。彼女の懸念は、ムーア (Moore 1966 = 2019) が論じたように近代化への経路が共産主義であろうと資本主義であろうと、歴史変動の犠牲者はつねに貧困層でありつづけた点である。かつて混合経済であったインドでは、貧困層の政治的動員における分散、利益横奪、抑圧などがみられ、独立運動期に結成し、独立後、20世紀後半には与党で

あり続けた政党である国民会議派の政策も場当たりのであった。多角的な利害にもとづく動員は民主主義の一形態だが、そこでのエリート支配 (Desai 1995: 298) と資源の集中がみられた点は、従属理論の前提である植民地支配の残滓ともいえる。

インド村落の社会構造を、カースト秩序とそれを正当化するヒンドゥー教の儀礼や象徴ではなく、土地所有と生産様式や生産過程などマルクス主義の視点で論じたアクシェイ・デサイは、インド社会学で従属理論に言及した例外的存在である (Desai 1966)。農村と都市の貧困分析に生涯を捧げた彼は、植民地統治と独立後のナショナリズムがエリートによる資産の独占を許したとし、農民運動の諸事例から貧困層の人権や宗教間の公正を問うた。しかしながら、彼の関心は政治的なものであったがために主流の社会学からは「外部者」扱いを受けた。さらに階級分析をもとに働く貧民、国家とナショナリズム、開発／発展、国家政策や貧困削減、社会運動などのテーマを提示した彼の研究は、のちの実証研究で継承されることはあまりなかった (Patel 2021: 19)。

4 社会的公正と草の根からの応答, 1970年代～

(1) 農村と都市における格差

スリンダール・ジョードカ⁽⁸⁾は、1960年代以降の緑の革命による灌漑設備等の整備が功を奏した北インド、ハリヤーナ州の農村で1988-89年と2008-09年に調査を実施した。彼は1970年代から続いた政府による総合農業開発計画 (Integrated Rural Development Programme) を通して、企業家的農業が台頭した点を指摘した。1980年代後半までには、市場での交換関係とそこでの合理的な計算が農民たちの生産過程を特徴づけるようになったが、彼はこれを「土地問題から価格問題」への転換とした。つまり、土地所有層が原料価格と作物価格との差を計算するようになり、行政との交渉を図る農民像も生まれてきたという。つまり、国家に農業への介入を求める農民の動きからは、企業経済ではなく生産者の保護を前提とした国家の相補的な役割がみえてくるわけである。もちろん、農村変動にみるカースト差別の実態を研究してきたジョードカは、搾取構造を見落としていたわけではない。彼の2000年代後半の調査では、こうした趨勢が深まったにもかかわらず、新しい都市の専門職層によるエリート主義と、「合理的に考えることができない農村」像という排他的な見方が存続していたわけで、それに対して疑義を呈したのである (Jodhka 2014)。

一方で他の北インド諸州——ビハール、マディヤ・プラデーシュ、ラージャスターン、ウッタル・

(8) インド社会科学評議会が人的資源開発省の要請を受けて2012年にはじめた「2012年度アマルティア・セン社会科学功労賞 (Amartya Sen Award for Distinguished Social Scientists)」の受賞者である。本制度は、2014年の政権交代で首相の座についたヒンドゥー原理主義者のナレンドラ・モーディー (Narendra Modi) のもとで棚上げになった。同政権を批判してきたセンが設置当初、学長として迎えられた国立ナランダ大学の運営をめくり外務省と口論になったことが理由とされる (Akshaya Mukul, "Amartya Sen Award to be Shelved?" *The Times of India*, 21 September 2016)。

ブラデーシュ——はヒンディー語で「病気」を意味する州と呼ばれてきた。ビハール州北部の農村で1978-80年に調査をおこなったアーナンド・チャクラヴァルティーは、農業の商業化が支配的カーストの権力を強め、低カーストの土地なし農民を搾取する構図を描いた(Chakravarti 2001)。彼による権力概念は、他の集団を凌駕する生産様式の支配、支配的カーストという属性に由来する社会的権力、村落共同体全体を管理・統制する能力の3つに根ざしている(*ibid.*: 286)。そこから土地なし農民が労働力として調達される過程から、労働日の分析、農繁期における日雇賃金の体系、労働請負制度、「農奴」の賃金などを詳細に分析した。こうした農民層の分解は、もとより搾取の温床となっていた小作制度が1960年代後半に日雇・季節労働力に代替されるようになったこと、また灌漑設備がこうした雇用慣行を後押ししたことが背景にある(*ibid.*: 66-67)。

一方で都市はどうか。インドの社会科学では都市研究は後発の領域である。筆者は別稿で、独立後の国家建設の経緯から、ガンディー思想にもとづく村落からの民主化、1960年代のコミュニティ開発プログラムが農村の貧困削減を目的にしていたことが大きいと指摘した(佐藤 2019)。一方で、都市社会学は都鄙連続体、向都移住者の適応様式、婚姻や家族形態、カースト組織の変容などの社会生態学的視点を重視していた(Rao 1974)。そのようななかで、1960-70年代のボンベイ(現ムンバイ)大学社会学科を中心に展開したボンベイ学派(The Bombay School)は、カーストを儀礼や象徴から構成される秩序としてとらえず、その階梯が階級と共犯関係にある点に着目した。そして、上述のアクシェイ・デサイとデヴァダス・ピレーは、この両者の属性的関係を安定的に支えるのが植民地統治期に固定化された封建的生産様式にあると指摘した。都市の産業化においてもこうした生産様式がアウト/低カーストからおもに構成される都市貧困層の労働過程を規定するわけである(Desai and Pillai 1970)。欧州がリードした都市社会学の政治経済学視点(Jayaram 2013)が見直されたのは、1990年代初頭に起きたボンベイでのヒन्दゥー/ムスリム暴動の背景を、起業家や労働者階級、土地への権利、住宅と衛生、ポピュリズムと都市政治をテーマに学際的に編集したスジャータ・パテルと社会史家アリス・トナーの仕事である(Patel and Thorner eds. 1997)。

その間、労働組合活動にもかかわりながらも、露天商を中心としたインフォーマル・セクター労働者の労働過程や政策面での排除などの調査を重ねてきたシャリット・ボーミックによる研究(Bhowmik 2009)や向都移動者のスラムにおける就労・生業の実態や居住改善のためのコミュニティ参加、そこでの排除と統合の過程を描いたヴァンダナ・デサイの研究(Desai 1995)は、次項で論じる都市貧困層が主体となる草の根運動の分析枠組みにも関連が深い。

(2) 「ポスト開発主義」と草の根からの応答

サティーシュ・デシュバンデは、ネルー時代における開発主義を「失敗」と評した。開発を牽引した中産階級が、国家建設の過程で整備された近代的制度の要求ではなく、伝統的な社会的実践——カースト、ジェンダー、地域——の枠組みでの開発政策の要求に応え、そこから市民社会が形成されたからである。民族主義リーダーの多数が意図したインドの近代化は、トップダウンでありつつも

世俗的な理念にねざしていたが、開発に必要な社会技術が不足するだけでなく、大衆の役割も不在であった (Deshpande 2003: 144-46)。インドの1970-80年代にかけての貧困と社会運動に関する研究動向 (表1・2) はこの流れに位置づけることができる。

この「運動の『脱制度化』」の時期 (Ray and Katzenstein 2005) に先行するネルー政権下では、重工業化政策のもとで農業部門が軽視された。その帰結として、1965-67年にビハール州を中心に飢饉が発生し、1967年には隣接する西ベンガル州の北部、ナクサルバリ地方で農民の武装蜂起が起こった。農工間格差、高・中間カーストと他のカースト諸集団との格差、フォーマルとインフォーマル・セクター間の格差に加えて、慢性的な貧困が下層民の不満の温床となっていたと、インドに帰化した米国出身のゲイル・オムベットは指摘する (Omvedt 1993: 35-42)。

1970年代には、非常事態宣言にいたったインディラ・ガーンディー政権期における民主主義の危機は、市民的権利を主張した貧困層の運動をもたらした。その一例として、インフォーマル・セクターの女性就労者を組織化し、1972年に設立されたグジャラート州アフマダーバードに拠点をおく女性自営者協会 (Self-Employed Women's Association; SEWA) がある。SEWAの要請により1986年に中央政府で女性自営者のための委員会が設立され、また1988年には同委員会が「労働の力」を意味する『シュラムシャクティ』をまとめた。350頁にもおよぶ同報告書は、国内の女性貧困層の労働と生活の実態を網羅的にまとめたうえで、労働条件の改善に向けた法制の提言をおこなった (National Commission on Self-Employed Women 1988)。同報告書に先立つ調査には、社会学者のマイソール・パニーニもかかわっていた⁽⁹⁾。

同時期の農村部では、北インドのウッタル・プラデーシュ州で女性たちが集合的に樹木に抱きつくかたちで政府による森林伐採に抗ったチプコー運動や、1980年代から現在にいたるまで闘争が続いているグジャラート州のナルマダ渓谷のダム建設反対運動が展開した。「脱制度化」期の運動をかつての階級対立にもとづく労働運動ではなく、「新しい社会運動」の概念で捉えたオムベットはその社会的基盤の形成を次のように提示した (Omvedt 1993: 304-7)。^①反カースト運動においてダリトが主導的な役割をはたした点、^②環境運動へのあらゆる階級やエスニック集団からなる女性参加がみられた点、^③地域間格差による経済的周辺地域における運動、^④被搾取側から搾取のシステムに対して権利を要求する運動である。

旧来型の階級闘争と異なる「新しさ」は、農民運動の場合は地主から土地を獲得しようとする性格のものではなく、環境運動の場合は国家主導の大型開発プロジェクトにより突然土地を失うことになった人々の、土地を守るための徹底した集合的行為である。後者に関して特筆すべきは、アミータ・バヴィスカルによるナルマダ河流域での民族誌調査である。彼女はアディヴァシー (*adivasis*) と呼ばれる先住民族の居住地域やヒンドゥー教の巡礼地において、住民たちが精霊信仰の象徴がダムに沈むことにより文化的アイデンティティを喪失し、伝統的農業を含む生業手段を剥奪され、都市を含む

(9) 2010年9月12日、筆者がパニーニと実施したSEWA創設者、イラ・パット (Ela R. Bhatt) への聞き取り。

他地域に移住し、債務労働者となっていた経緯や、先住民らが担う抵抗運動とそこでの文化的表象を記録した (Baviskar 2005 [1995])。

研究者が調査を通して社会変革を担った事例も見逃せない。マハーラシュトラ州境に位置する山間部で展開した、カルナータカ州による社会林業プログラムの調査を続けた元インド社会学会会長のインディラ・ラマラオは、最貧層の女性たちに語り (storytelling) を促した。淡水の養殖場が農薬散布により汚染されることで、森の奥で食料を探さざるをえなくなった状況や、そこでの性暴力の危険性、町の市場で食料を調達することによる貧窮化などを語らせることで気づきの機会を与え、彼女たちが紡ぎだしてきたローカルな知をプロジェクトに統合する成果を取めた。そこからラマラオは、社会学的調査を知の主体である貧困女性を媒介する社会変革の手段だと主張する (Ramarao 2020)。以上は、国家主導による開発に異議を唱えた集合行為といえよう。

5 経済自由化、多様化、包摂的成長のなかの貧困問題

1980年代末を伏線としながらも、1991年にはじまる経済自由化ならびに宗教ナショナリズムの台頭は、社会変動的視点による不平等の社会学的研究をもたらした (Katzenstein and Ray 2005; Panini 2014)。また、世界銀行によるダム建設や超国家企業による工業団地建設にともなう強制移住とローカルな生態系を生活の糧にする住民の土地剥奪 (Meher 2012; Verma 2012)、国家による鉱山開発とトライブの共有地の喪失による文化的象徴やアイデンティティの剥奪など (Xaxa 2012)、地域開発による住民の貧困化を実証する研究がさかんになった。一方では都市中産階級の台頭と貧困層の社会的・政治的排除を問う実証研究もでてきた。以下、農村や地方の周縁化と都市の階層分化の観点から、貧困の諸相をあつかった社会学研究を紹介する。

(1) グローバル化と農村の貧困

2000年代に入ってからインドでは、むしろグローバル化の文脈で開発の負の影響をとらえる研究、新自由主義や多元的發展・自由の模索といった文脈で研究が浮上した。たとえば、ジェイコブ・カタカヤムは、2008年の第11次5か年計画が国民の4分の1が貧困の罫から抜け出せていないことを認めたことに言及する。そのうえで、グローバル世界に共通の開発主義は、土地だけでなく水源や植生など、世代間で共有されてきた財産に無差別に犠牲を強い、その結果、貧困層を生存維持の手段から切り離し、ローカルな社会・文化環境から根こぎにしてきたと批判する (Kattakayam 2011: 7-8)。

米国のモンサント社をはじめとする遺伝子組み換え作物の種子導入による農業のさらなる商業化と貧窮化した農民のたび重なる自殺 (Vasavi 2009a)、その背後にある世界貿易機関による超国家企業の途上国市場参入への取り決めに抵抗する農民運動 (Panini 2014) など、枚挙に暇がない。一方で、パニーニは反グローバル運動が掲げる反帝国主義は革命的であり、その意味では米国に対抗して聖戦を掲げるアルカイダとの共通点が否めないという。とはいえ彼は、上記の運動は小農の生存を賭した

ものである以上、グローバルな平等の言説に影響し、さらには飢餓の撲滅や気候変動といったミレニアム開発目標のアジェンダ醸成にも寄与すると主張した (Panini 2014: 322)。

グローバルな不平等のローカル化された問題は国内の不平等に直結する。経済自由化後に進んだ資源と知識の大都市への集中や、英語一辺倒の教育・研究は、インド社会学会の第31回全国大会のシンポジウム「社会学教育・研究の再設計」のメインテーマになるほど深刻である。アニナリ・ヴァサヴィは、研究・教育の中央-地方間格差に警鐘を鳴らしてきた社会学者の1人である。彼女は南インドのカンナダ語で著された開発/発展にかかる諸論文を英訳したが、同著作ではインド諸言語にある文化や社会の固有の意味が看過されている現状を、「博識あるサティーシュ・サバールワル教授が『インド諸言語で社会学を勉強している膨大な数の学生たちは意味のない言語 (gibberish) を読んで

資料1 プナールチット (Punarchith) での曲の歌詞

(1) 自然の協働とともに	(2) われらが築く	(3) 己のわがままを正せ
雲から、雲から また、また 真珠のごとく雨が来る 若人の自己尊厳の種を蒔く	われらが築く、われらが築く もちろんわれらが築く 壊れた心を、描かれた夢を われらが築く	己のわがままを正せ、己のわがま まを正せ、嗚呼、人間よ！ 空腹の民を満たせ (コーラス)
木々が生き生きと茂る 若人の希望を満たすべく 落葉し土を肥沃にさせる	われらが夢を築く われらが心を築く (コーラス) 争いも痛みもない大地よ 百の心、十万の夢 歌を作ろう 大地の歌を (コーラス)	同じ土地に生まれ、同じ井戸から 水を飲み われわれだけに食べ物がないのは なぜだ 満腹で食べ物を捨てる者もあり、 食べ物を求めてさまよう者もいる 平等に生かさなさいこの違いと差別 はなぜ？
陽と月が順番に待つ 光で覆いつくせるように 国を担う若人を 花々が香りで満たし 若人の心と体が 力でみなぎる	カーストなき、不安なき大地よ 慈愛の家族 新たな歌を作ろう この土地の歌を (コーラス)	この生命は一個の誕生と死、忘れ ぬよう (コーラス)
自然が協働し、万物が及ぶ 若人のありのままの夢が叶うよう に (コーラス)	革命の赤き残り火を携え いばらの道を歩もう われらが命の血統の歌を作ろう この土地の歌を作ろう (コーラス)	演説では貧困を解消するが みな飢餓と病気で亡くなっていく 目を開け、空腹の民の状態を見よ この生命は一個の誕生と死、忘れ ぬよう (コーラス)
	われらが築く 平等と愛に満ちた大地を あの心からこの心まで 橋を架けよう 橋よわれらが架ける	沈黙を保てば抑圧され、 生きる糧と生活が盗られる 勇気を持って立ち上がれ、われら の権利を請え 歓喜とともに他の民のように生き よう

出所：カンナダ語原文からの英訳はヴァサヴィ氏による。各曲の原題は次のとおり。(1) "With Nature's Co-operation," composed by Hansoge Somashekar; (2) "We Will Build," composed by Satish Kulkarni; (3) "Give up Your Selfishness" (composer unknown).

いる』(Saberwal [ママ] 2008: 465)⁽¹⁰⁾と不満げに発言したのは驚くに値しない』(Vasavi 2009b: 4)と批判した。そこで彼女は、近代化の推進機構たる国家による「開発主義」が台頭する中産階級の文化的支配を宗教的儀礼や象徴の再解釈を推し進め、階層格差を深化させ、農村貧困層が文化的にも周縁化される構図を指摘する (*ibid.*: 15)。

ヴァサヴィはカルナータカ州の村にあるNGO、プナルチット⁽¹¹⁾の理事も務めている。同NGOは農村の若年(潜在的)失業者が有機農法の技術を身につけ、農村の未来を担うことと、バンガロールをはじめとした大都市に出稼ぎ・移住することでスラムに居住し、相対的剥奪を通じた疎外を防ぐことを目的としている。このポスト開発論にもとづく地域・生態系に固有の生計手段やローカル文化に即した生活様式 (Vasavi 2009b: 12) を実践し、都市中心の資本主義的發展に抗っている、とヴァサヴィはいう。彼女は若者たちとともに「革新的」な曲を作詞しており⁽¹²⁾、筆者は同NGO訪問の際にこれらの歌を聴く機会に恵まれた(資料1)。

こうした草の根運動に立ちはだかるのが、2014年以降つづくモーディー政権である。同政権の政策はミュルダール(1968=1974: 533-34)が南アジア諸国について、「義務を交付し強制しようとする意思」が欠如している現状を憂いたことを想起させる。彼は、諸個人の態度と制度の大幅で急速な変化が貧困解消に望まれるが、その社会的目的のために力行使することは民主主義からの後退でもあるとした。こうした強い国家への移行は、格差解消を求める集合的行為に影を落としている。たとえばパンジャブ州の農民による抗議運動は、農作物の購入・生産・保管について政府の保護を撤廃し、大企業の商業的利益のもとに置くことを意図した2020年の連邦政府による法制定に対するものである。その調査にあたったジョードカによると、抗議運動の波は首都にもおよび、ときには30万人にも参加者が膨れ上がり、高速道路を占拠する動きになった。一方では参加者の多くは上位・中位カーストの男性である。緑の革命以降、農業の省力化が進んだことから女性労働力は主婦化されたことが要因の1つである。カースト・階級・ジェンダーの面で「恵まれた」層でありながらも、こうした抗議運動が新自由主義的で権威主義的な現政権に対して、草の根民主主義の実践例を提示していることにジョードカは期待を寄せる (Jodhka 2021)。

(2) グローバル化と都市の貧困

都市、とくに大都市での開発と変動は開発主義を再考する格好の場となっている。開発主義は「公衆の社会福祉の見通しをもたらす」(Pathak and Das 2019: 8-9) すが、一方では宗教や手品のように人びとが虜になるように設計されたイデオロギーでもあり、それに対して行為・行動・思考・実践を通して能動的に働きかけるも、開発には魅惑と幻滅がつきものである (*ibid.*: 9-10)。パラムジート・ジャッ

(10) 実際の書誌情報は次のとおり。Sunder, Nandini and Amita Baviskar (2008) "For a Sociology of India: Satish Saberwal in Conversation with Nandini Sunder and Amita Baviskar," *Contributions to Indian Sociology* 42(3): 443-68.

(11) Punarchithはカンナダ語で「再考する (re-think)」の意 (<http://www.punarchith.org/>)。

(12) 2016年9月1日、ヴァサヴィとの対話。

ジは分配的公正の観点から、2010年代前半のインドの開発／発展を次のように辛辣に評価する。

開発は社会の各層に裨益すべきだが、ポスト植民地期のインドは開発の矛盾を呈している。一方では「輝くインド (shining India)」が、他方では「飢えるインド (starving Bharat)」がある。前者は都市で、学歴があり、すぐれて消費主義的な者であり、後者は農村で、後進的で、学歴が低く、基本的ニーズを満たす金銭すらない者である (Judge 2014: 382)

ジャッジは英語の India とヒンディー語の Bharat による都市と農村の区分は一般的な用法であり、この二分法は複数の選択肢から選ぶ矛盾に支配された世界と、基本的ニーズを満たすために苦悶する世界に対応するとしたうえで、選択肢のアクセスをめぐる格差は都市部でも顕著であるとする (*ibid.*: 384)。この公正をめぐる政策的課題はより構造的である。たとえば、先述のパヴィスカールは2000年代初頭にフィールドをデリーに移し、インフォーマルな労働や居住が近代的な都市の美観を損ねると主張する新しい「環境運動」の生起を捉えた。彼女は都市空間の審美性に対する中産階級の集合意識をブルジョア環境主義と定義した。ジャワハールラール・ネルー全国都市再生ミッション (JNUURM) や2011年にデリーで開催された英連邦競技大会 (The Commonwealth Games) などのメガ・イベントは台頭する中産階級が望む都市計画に反映され、露天商や行商人、スラムの撤去を正当化すると主張する (Baviskar 2019)。

これに関連して、デリー近郊のスラムで調査をおこなったサンジェイ・スリヴァスタヴァは、中産階級の居住区でも調査し、「公共の迷惑たるスラム」という言説が地縁型住民組織 (residents' welfare associations) で醸成され、そこでの日常的な会話がメディア・国家・司法組織に取りあげられる過程を明らかにした (Srivastava 2015)。とくに深刻な電力・水不足が中産階級による消費の増大ではなく、過密なスラムによって引き起こされているという広く共有されている信念がスラム撤去を後押ししている。こうした階級にもとづく偏見を後押しする現象を調査したのがヴィーナ・ダスである。彼女はデリー近郊のスクワッター地区でおこなった向都移住者第一世代に関する民族誌調査から、都市貧困層のシティズンシップとは国家から「付与」される成員資格ではなく、獲得されるものとした。とくに基本インフラの供与においては役人との庇護-随従関係にあるスラムのボスの存在の有無が大きい (Das 2011)。

一方で、スリヴァスタヴァは階層上昇志向が高い都市貧困層の消費主義、就労と新しい価値観も検証した。そのうちの1つは、将来設計や商売に対する合理的な計算を身体化しきれていないスラム女性らが、生計獲得を目的にアムウェイなどのマルチ商法に関わったことを描いた研究である (Srivastava 2015)。より最近の研究は、都市部のみならず毛沢東主義の農民運動が残る北インド、ラージャスターン州の農村における若年貧困層向けの官民連携による職業訓練 (接客・販売) を実証した。ここでは、「中産階級に備わっている」話し方や身振りなど文化資本を身につけ、就職活動に勝ち抜き、失業率が高いなかでサービス産業の底辺に参入するも、就労や生活設計において合理的な計算ができる個人を量産していく人材育成企業の陥穽を描いている (Srivastava 2022)。

6 結 語

本稿はインドの近代化や開発政策の流れのなかで、開発／発展にかかる社会学のテーマや射程、言説や知の実践がいかに展開したのかを貧困問題とのからみで整理した。その時々で社会学が政策実現に貢献することが期待されたものの、実証研究が積み上げてきた知見はインド社会の構造や制度における諸矛盾を指摘するものが多く、2014年にはじまり2019年に第二次内閣が発足したモデー政権下で学問を含む言論の自由をめぐる統制がみられるようになってはいるものの、この傾向は健在である。

本稿の知見は次の3点に集約できる。1つ目は、1960年代後半までトップダウン型の工業化と資源配分をめざした開発／発展が顕著だった一方で、インド社会学はガンディーによる村落からの民主化を規範とし、農村部での土地や資源をめぐるカーストと階級の権力の不均衡から貧困の現状を実証してきたことである。

2つ目は、1960年代末からの草の根運動の展開や、1970年代なかばの民主主義の危機が、貧困や不平等にかかる社会運動論などのサブ領域を発展させたことである。一方で、同時期にこうした関心から国際的に台頭した従属理論がインド社会学では周辺的な位置に留まった。一国中心の分析にとどまったインド社会学が、貧困層を対象にした実証研究をより深めるなかで、実質上、いわゆるオルターナティブな発展論に耐えうる知識を生産したのもこの時期の特徴である。

3つ目は1990年代以降の経済自由化、そして同時並行的に活性化した宗教ナショナリズムの時代におけるインド社会学の多様化である。貧困問題とのかかわりでは、①経済自由化やグローバル化にともなう開発政策や階級構造の矛盾を農村と都市それぞれで実証した研究が展開した点と、②こうした矛盾に抗う貧困層による集合行為に関する理論的な論考が多く発表されたのがこの時期の特徴であろう。2001年、2005年、2011年、2013年、2016年、2019年のインド社会学全国大会への参加も含めて、インド社会学の動向分析から筆者が把握するかぎり、こうした研究は国際開発論の読者にはなじみのある諸議論と重なる部分が多い。しかしながら、現地の社会学者たちは国内の学協会を中心に、ときには国際開発論の成果を参考にしつつ (Ghosh ed. 2012)、開発／発展、貧困の諸問題に向き合っているように思われる。そして、マクロな社会変動の分析を得意とし、インドでは定着もしている「開発社会学」の枠にとどまらず、複数の連字符社会学が貧困を開発問題としてとらえてきた点にインド社会学の特徴がある。

付 記

本研究はJSPS 科研費19KK0049の助成による成果の一部です。執筆にあたり査読者をはじめ多くの方々から貴重なコメントをいただいたことに感謝申し上げます。

引用文献

- Babu, Sunil G.T. (2013) "Sociology, Village Studies and the Ford Foundation," *Economic and Political Weekly* 48(52): 113-18.
- Baviskar, Amita (2005 [1995]) *In the Belly of the River: Tribal Conflicts over Development in the Narmada Valley*, 2nd ed. New Delhi: Oxford University Press.
- (2019) *Uncivil City: Ecology, Equity and the Commons in Delhi*. New Delhi: Sage Publications.
- Béteille, André (2005) *Anti-Utopia: Essential Writings of André Béteille*, edited by Dipankar Gupta. New Delhi: Oxford University Press.
- Bhowmik, Sharit K. (2009) "India: Labor Sociology Searching for a Direction," *Work and Occupations* 36(2): 126-44.
- Chakravarti, Anand (2001) *Social Power and Everyday Power Relations: Agrarian Transformation in North Bihar*. New Delhi: Sage Publications.
- Das, Veena (2011) "State, Citizenship, and the Urban Poor," *Citizenship Studies* 15(3/4): 319-33.
- Desai, Akshay R. (1966) *Social Origins of Indian Nationalism*. Bombay: Popular Prakashan.
- and S.D. Pillai eds. (1970) *Slums and Urbanization*. Bombay: Popular Prakashan.
- Desai, Vandana (1995) *Community Participation and Slum Housing: A Study of Bombay*. New Delhi: Sage Publications.
- Deshpande, Satish (2003) *Contemporary India: A Sociological View*. New Delhi: Viking/Penguin.
- Ghosh, Biswajit ed. (2012) *Interrogating Development: Discourses on Development in India Today*. Jaipur: Rawat Publications.
- Ghosh, Biswajit (2012a) "Introduction," in B. Ghosh ed., pp. 1-12.
- (2012b) "Understanding Development: Theory and Practice," in Ghosh ed., pp. 27-48.
- Jayaram, Narayana (2013) "The 'Bombay School' and Urban Sociology in India," *Sociological Bulletin* 62(2): 311-23.
- Jodhka, Surinder S. (2014) "Emergent Ruralities: Revisiting Rural Life and Agrarian Change in Haryana," *Economic and Political Weekly* 49(26/27): 5-17.
- (2021) "Why Are the Farmers of Punjab Protesting?" *Journal of Peasant Studies* 48(7): 1356-70.
- Judge, Paramjit S. (2014) "Two Narratives of Failure: Politics of Development and the Making of Modern India," *Sociological Bulletin* 60(3): 370-88.
- Kattakayam, Jacob J. (2011) "Development, Polity, and Social Tensions," *Sociological Bulletin* 60(1): 4-17.
- Kaur, Ravinder (2003) "Development Sociology and the 'Poverty' Question," Maitrayee Chaudhuri ed., *The Practice of Sociology*, pp. 129-57. New Delhi: Orient Longman.
- Kumar, Anand (2011) *Understanding Globalisation and Emerging India*. New Delhi: Palm Leaf Publications.
- Meher, Rajkishor (2012) "Development or Livelihood Insecurity of Ecosystem People? The Social and Ecological Costs of Modern Development in Contemporary India," in Ghosh ed., pp. 212-36.
- ムーア, バリントン (宮崎隆次・森山茂徳・高橋直樹訳) (2019) 『独裁と民主政治の社会的起源——近代世界形成過程における領主と農民 (下)』岩波書店 (Moore, Barrington Jr. (1966) *Social Origins of Dictatorship and Democracy: Lord and Peasant in the Making of the Modern World*. Boston, MA: Beacon Press.)
- ミュルダール, グンナー (板垣興一監訳/小浪充・木村修三訳) (1974) 『アジアのドラマ——諸国民の富の研究 (上) (下)』東洋経済新報社 (Myrdal, Gunnar (1968) *Asian Drama: An Inquiry into the Poverty of Nations*. New York: Pantheon Books.)
- National Commission on Self-Employed Women (1988) *Shramshakti: Report of the National Commission on Self Employed Women and Women in the Informal Sector*. New Delhi: Government of India.
- Omvedt, Gail (1993) *Reinventing Revolution: New Social Movements and the Socialist Tradition in India*. Armonk, NY: M.E. Sharpe.
- Oommen, Tharailath K. (2007) *Knowledge and Society: Situating Sociology and Social Anthropology*. New Delhi: Oxford University Press.
- Panini, Mysore N. (2014) "The Pursuit of Equality in India," in Yogendra Singh ed., *Indian Sociology, Vol. 2: Development and Change*, pp. 306-59. New Delhi: Oxford University Press.

- Patel, Sujata and Alice Thorner eds. (1997) *Bombay: Metaphors for Modern India*. New Delhi: Oxford University Press.
- Patel, Sujata (2021) "The Nationalist-Indigenous and Colonial Modernity: An Assessment of Two Sociologists in India," *Journal of Chinese Sociology* 8(2): 1-23.
- Pathak, Dev N. and Amiya K. Das (2019) "Introduction: Developmentalism—On a Trope of (Dis)Enchantment," in D.N. Pathak and A.K. Das eds., *Investigating Developmentalism: Notions of Development in the Social Sphere*, pp. 1-51. New York: Palgrave Macmillan.
- Ramarao, Indira (2020) "Lending Voices to the Marginalised: The Power of Narratives as Alternative Sociological Discourse," *Sociological Bulletin* 69(1): 7-16.
- Rao, M.S.A. ed. (1974) *Urban Sociology in India: Reader and Source Book*. New Delhi: Orient Longman.
- Ray, Raka and Mary F. Katzenstein (2005) "Introduction: In the Beginning, There Was the Nehruvian State," in R. Ray and M.F. Katzenstein eds., *Social Movements in India: Poverty, Power, and Politics*. New Delhi: Oxford University Press.
- Ray, Sthitapragyan (2008) "Alleviating Poverty through Micro-finance: SGSY Experience in Orissa," *Sociological Bulletin* 57(2): 211-39.
- Saksena, Ram N. (1971) "Sociology of Development and Planning in India," *Sociological Bulletin* 20(1): 1-11.
- 佐藤裕 (2019) 「インドにおける開発社会学の展開——周縁層からみた近代化と開発の再検討」『社会学論集』(上智大学) 43: 33-54。
- Singh, Sheobahal (2010) *Sociology of Development*. Jaipur: Rawat Publications.
- (2014) "Sociology of Development: Explorations and Trends," in Yogendra Singh ed., *Indian Sociology, Vol. 2: Development and Change*, pp. 19-65. New Delhi: Oxford University Press.
- Srivastava, Sanjay (2015) *Entangled Urbanism: Slum, Community, and Shopping Mall in Delhi and Gurgaon*. New Delhi: Oxford University Press.
- (2022) "Relational Flexibility: Skills, 'Personality Development,' and the Limits of Theorizing Neoliberal Selfhood in India," *American Ethnologist* 49(4): 478-90.
- University Grants Commission (2001) *Report of Curriculum Development Committee in Sociology (March 2001)*. New Delhi.
- Vasavi, Aninhalli R. (2009a) "Suicides and the Making of India's Agrarian Distress," *South African Review of Sociology* 40(1): 124-138.
- (2009b) "Indian Language Writings and Social Sciences: New Texts, Voices and Representations," in A.R. Vasavi ed., *The Inner Mirror: Kannada Writings on Society and Culture*, pp. 1-27. New Delhi: The Book Review Literacy Trust.
- Verma, Manish K. (2012) "Policy Planning in Development Projects: Processes and Limitations," in B. Ghosh ed., pp. 237-62.
- Xaxa, Virginius (2012) "Tribes and Development in India: Some Observations," in B. Ghosh ed., pp. 307-23.